

動物たちの発情期の猟

文 木村安兵衛

Text by Yasube Kimura

残 暑と暦ではいうものの、実際にはまだ夏が続いている感のある今日この頃です。

気温の高さに花は季節を間違えて咲いてしまう、なんていう話が出てしまうような気候の中でも動物たちの発情期はキチンとやってきました。どんな気候であっても動物は性欲で体内カレンダーを修正してしまうのでしょうか。

この鹿の発情期に行く猟を毎年私はとても楽しみにしております。コール狐といって発情した鹿の鳴き声をまねて笛を山の中で鳴らします。ピーピー！オスの鳴き声をまねればテリトリを侵されたと勘違いしたオス鹿が怒ってやってきます。時として「どんなイケメンが現れたのだろう？」と興味津々顔のメスが覗きにやってきました。ピー、メスの鳴き声をまねれば「女の子が来た！」と笑顔満々でオスがやってきます。無表情に見える野生動物ですが、何故か彼らの心のうちが分かるのです。

そんな幸せ顔の彼らにそうつと鉄砲を向けてドン！と撃ってしまふのです。「そんな筈じゃなかった」という顔をする鹿がなんとも愛おしく「騙してやっただぜ」といういたずら心が楽しい狐なのです。

犬を放ち鹿の逃げ道で待ち伏せする巻き狐は、目の前の茂みから鹿が全速力で飛び出すので、使用する鉄砲は上下二連銃または自動銃という連発しやすいものが多いのですが、コール狐では鹿がトコトコやってくるし、距離もあるので今回はハーフライフルというショットガンライフルを使用することにしました。昨年長野県で起きた立て籠もり事件の際に警察官がハーフライフルで殺されてしまったことを受けて、ハーフライフルの規制が厳しくなりました。次回の所持許可更新時には使用実績も厳しく問われる為、久々の狩猟での使用です。

山に入り鹿笛を鳴らします。反応なし。斜面の裏側に回り込み、また笛を鳴らします。怒ったような鳴き声はすれど姿を現しません。鹿の鳴き声が遠ざかっていきます。どこかでこちらの姿を見られたか、こちらが風上で人間の匂いを気取られたかでしょう。

次の山へ移ります。同じことを何度も繰り返しますが鹿には遭遇しません。半ばあきらめて町に降りた時、ヨロヨロとした鹿が車道を彷徨っています。病気かな？様子を見ます。毛並みは良い、でも前脚に新しい傷があり、目がうつろになっている。きつと車と接触

したのでしょう。日頃の行いが良いので山の神様がプレゼントしてくれたのだ！と喜ぶものの道路路上で鉄砲を撃つことはできません。車の中から鉄砲を撃つこともできません。ヨロヨロしていてもさすがは鹿、捕まえようと走っても追いつくことはできません。鹿が山中に逃げ込むまでついて行き、森の中に入った所でドン！

何故か町の噂は早く山から下りると「交通事故の周」という誇らしいあだ名が早速ついておりました。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA（米食品医薬品局）研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザー・ジャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2021年3月末時点31店舗を数える。

